

残そう、自然の宝石箱・のりくら

くらがね通信

No.78 (秋号)

乗鞍岳と飛騨の自然を考える会

2019年10月10日発行

<http://iidalaw.net/norikura.html>

旅する蝶 アサギマダラのマーキング

小原靖子

9月1日、恒例のアサギマダラのマーキングが、今年も鈴木俊文さんの指導の下に行われました。天候は雲が多く雨が心配されましたが、マーキング場所の日和田に近づくころには、日和田富士も姿を現し、まあまあの天候になって来ました。

御嶽山麓にに入る手前で、小日和田に立ち寄りました。昨年5月に絶滅危惧種のヤマキチョウを守るため、食草のクロツバラ



フジバカマ

を会員も手つだって植栽した所で、その成長具合を見るために立ち寄りました。辺りはヨツバヒヨドリ、ハンゴンソウ、フジバカマ、マツムシソウと秋の花がいっぱいです。クロツバラは順調に生育していて青い実もつけていました。来年にはヤマキチョウが飛び交っている姿が見られることを願うばかりです。

その後、柳蘭峠に移動。途中道沿いのヨツバヒヨドリは蝶が好む状態で、蝶が舞う姿が期待できました。車窓からアサギマダラの姿を探す参加者たち、3頭飛ぶのを見つけました。

前日鈴木さんが偵察に来たときは、100頭近く飛んでいたとのことでした。柳蘭峠に到着後、マーキングの仕方を習い前日に



クロツバラの実



鈴木さんが捕獲しておいたアサギマダラが参加者に配られ、それぞれ油性マジックでマーキング後、空に放しました。

その後、少しずつ移動しながら蝶を探します。見つけると捕虫網を振りかざし追いかけます。アサギマダラはゆっくり飛んでいるように見えますが、すばしっこく取り逃がす確率が高い。でも鈴木さんは捕獲率ほぼ 100%。一挙に次々と 3 頭捕獲の技も見せてくれました。

昼食はチャオスキー場のゲレンデ下でとりました。熊の姿が見られたということでしたが、私たちが到着したときはもういませんでした。

ゲレンデの草むらはヨツバヒヨドリ、サラシナショウマ、柳蘭の花盛り。食事もそっちのけで蝶を追いかける親子の姿もありました。時折パラリと雨粒が落ちて来ましたがすぐに止み、のんびりとした時間が過ぎて行きました。



マツムシソウとツマグロヒョウモン

アサギマダラ・マーキング会集計結果

宝田延彦

9/1 は 50 頭にマーク（♂ 43・♀ 7）しました。

9/8 に住之義さん親子が、再度チャオへ行ってマーキング（104 頭）したところ、9/1 のマーク個体 2 頭を再捕獲しました（この 2 頭は 1 週間ここに留まっていたことになる）。

他に、長野県からのマーク個体、1 頭も再捕獲されています。（8/9 にマークした人を探している状態です。）

僕も 59 頭にマークしてきました。そのうちの 1 頭は再捕獲でした。（こちらも 8/11 にマークした人・場所を探し中です）

うちの 1 頭は再捕獲でした。（こちらも 8/11 にマークした人・場所を探し中です）

初参加の方の感想

毎年来たいと思いながらなかなか参加できなくて、今年初めてサラシナショウマが咲く原っぱでアサギマダラを自分で捕らえることができて嬉しかったです。

飛驒の峠【その9】

木下喜代男

古安房峠 (2,050m) 一信玄の軍が攻め入り、ウェストンが3度超えた飛驒山脈の古峠

信濃と飛驒の国境である飛驒山脈を越える古安房峠は、大峠、信濃峠とも呼ばれ、その昔鎌倉街道であった。

勘違いをしている人が多いが、この古い峠道は今の国道158号線の安房峠(1,790m)ではなく、安房山(2,219.4m)の南肩(2,050m)を通っていた。(写真1)

鎌倉幕府は蒙古襲来の事もあり、北陸方面の防備を固めるため、松本からここを通って富山へ抜ける街道を整備したという。信州側からは稲核、入山、角ヶ平、祠峠、大野川、檜峠、沢渡、池尻、夏小屋を経て安房峠に至る。信州側では「飛驒道」、あるいは「飛州平湯通り」と呼んでいた。

なお、中尾峠から焼岳(当時は硫黄岳)の裾を捲いてこの安房峠へ至る鎌倉街道の脇道があったが、天正13年(1585)の焼岳爆発で廃道になった。

一時期信濃への東山道がここを越えていたとの伝説もあり、松本平への天台、真言宗の伝道の道でもあった。その後は永禄年間に甲斐の武田軍が、池尻の山城を基地にして飛驒へ攻め入る時往復。天正13年(1585)には金森長近に攻められた三木秀綱が、この峠を越えて落ちのびる途中、角ヶ平で非業の死を遂げた。

寛政2年(1790)江戸幕府は、この公道

を野麦街道へ移し、平湯の口留番所を廃止した。理由は、道が険しくてしかも多量の積雪で通れない期間が長い、野麦街道と比べて荷の往来が少ない、というものであった。

明治4年(1871)、飛驒および信濃中部、南部を管轄するため筑摩県が設置されたが、この県も松本県庁と高山支庁を結ぶ公用道路を野麦街道とした。しかし松本、高山間は、安房峠のほうが野麦峠経由より五里近いし、富山からは15里も近かったため、江戸期同様に安房道を通る人は多かったが、公道でなくなってからは、整備が行き届いていなかった。

明治8年発刊の『信飛新聞』3月28日版には、

「飛驒ノ高山舊一ノ町醸造渡世永田吉右衛門亡後家なみ同町舊二ノ新町副戸長日下部九兵衛祖母みちナルモノ去年飛州ノ吉城郡平湯村ヨリ信州安曇郡大野川村へ越ユル險隘ノ山道ヲ開ク費用ノ内へなみハ金二十五圓みちハ孫ノ久兵衛ヲ奨メ金二十圓ヲ出サシム丈夫モ及バヌ」

と高山の一庶民がこの峠道の改修工事費を寄付した行為を称え、筑摩県権令から表彰されたことが書かれている。彼女等をはじめ、高山からこの峠を越えて善光寺までお参りに行く人が多かったようだ。

明治20年代にはウェストンが3回通った。この峠が役目を終えるのは、大正のはじめに信州側から新安房峠まで自動車道が付けられた頃だ。この道は昭和13年(1938)に全線が開通した。

以前から一度この歴史の峠に立ってみたいと思っていたが、梅雨の晴れ間にようや



写真1

く念願を果たすことができた。峠の位置は分かっていたが、国道で分断された取りつき点が不明だった。このため自動車道の安房峠まで行き、ここから安房山に登り、頂上から県境尾根を歩いて峠まで下ることにした。

国道の峠から安房山の間は道が残っていたが、一面笹が覆い、終始ひどいヤブ漕ぎを強いられて時々道を見失うこともあった。筆者は若い時乗鞍から硫黄岳、十石山を経て安房山を通り、自動車道の安房峠に出て平湯まで歩いたことがあるのだが、その時は歩き易かった記憶がある。だがその頃は峠に関心がなかったので、旧峠を通過していたことになる。

笹を分けて立った安房山の山頂からは焼岳が望め、(写真2) 少し下ったところに安房トンネルの関連施設と思われるアンテナと建物が建っていた。頂上からはまったく道が消えていたので、GPS で方向を定めながら、笹の中を泳いで下った。

峠と思われる地形に到達したが、さらに小さいピークを越えた前方にも似たような平地があるので確認しに向かう。平地があったが、下はガレ場がある急峻な谷になっているので、街道がこんな危険なルートを採用はずがないとの判断で、最初の場所に戻る。

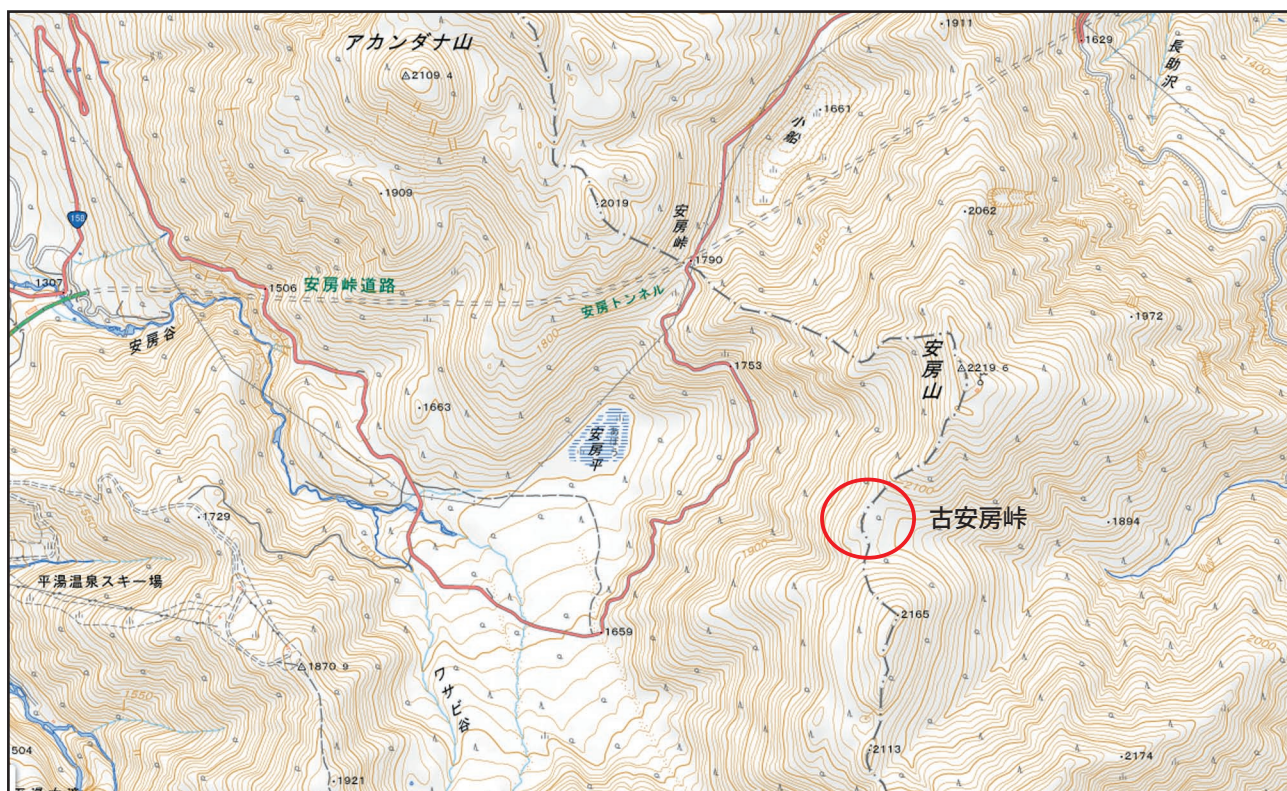
一面の笹原だがやはり峠らしい地形であり、少し飛騨側に下ると笹の中にしっかりした道が現れたので、間違いないことがわ



かった。人が通らなくなってから 100 年余の歳月が流れているが、往時を偲びしばし感慨に浸った。(写真3・写真4)

ウェストンは、明治 25 年(1892) 高山から平湯へ入って乗鞍に登頂。そのあと笠ヶ岳へ登ろうと蒲田へ行ったが案内を断られ、やむなくこの峠を越えて松本へ抜けているが、峠越えの様子を次のように記している。

「2 日ののち私たちは、安房峠越に、平湯を午前六時に出発した。この峠は主山系を 1920 メートルの高さで、乗鞍岳の北の肩の所で横断している。そして平湯と橋場のあいだの 40 キロにわたって、この種の風景で、中部日本でいちばんよい眺めを繰り広げている。私たちは狭い路に沿い茂った森でおおわれた隘路をのぼっていったが、その途中で時々、地這りで壊れた所を通った。そこでは高い樅の木が、たくさんのマ



ツチのように根こそぎになっていた、二つに折れていた、(中略) 飛騨と信州の境を示す小さな標柱の立つ峠の頂上をおりて、その東のほうの支嶺を廻って行くと、北の方にある側面の谷間から、急に美しいぼかし絵の風景が展開した。こんもりと木でおおわれた山腹の一角に、穂高山の灰色の花崗岩の岩塔と雪髯のある山腹が現れたのである。」

このようにウェストンが歩いた時もかなり荒れていたようだが、橋場までの眺めの良さを褒め、穂高山の景色を楽しみながら下っている。(写真5)



写真5

2度目は翌明治26年(1893)年針ノ木から立山に登り、念願の笠ヶ岳へ登るため富山から船津を経て蒲田へ入ったが、また区長に体よく断られた。平湯で人夫2人を雇い、この峠を越えている。峠には大きい木苺があり、人夫に名を尋ねると「馬苺」と言った。

ウェストンの笠ヶ岳登頂へのあこがれは止まず、明治27年(1894)今度は逆に松本からまたこの峠を越えて平湯に泊まり、翌日蒲田へ下っている。

日本の山をこよなく愛し、山村の人を常に温かい眼差しで見てくれたウェストンのことを考えながら、平湯側へ下って見る。原生林はかなり急な斜面で、先ほどの道の続きを探すが、笹の中に消えてわからなくなった。

この鬱蒼とした原生林は、蛭こそ落ちてこないが、泉鏡花の怪奇小説『高野聖』に出てくる天生峠(実際はこの安房峠といわれる)の描写そのものだった。

なお、古くから朝日を拝む聖地をアワ(アハ、アブ、アヲとも訛る)と呼び、それが

安房峠、天生（あもう）峠、青山峠などとして残っているという。

かなりの急斜面の笹原を転がるように下り、国道に出る。安房平側をのぞいたがそれらしき地形が見当たらず、国道を歩いて新安房峠へ戻った。安房トンネルが開通し

てからこの国道を通る車はほとんどなく、道の盛衰は現代も変わらない。

（現地調査：平成30年6月17日）

初出日本山岳会年報『山岳』No114を改稿



お知らせ（9月28日に行われた御嶽山の自然（Ⅰ）の続きです）

☆公開講座：自然談話室

御嶽山の自然（Ⅱ） 話者；小野木三郎

10月18日（金） pm7:00～ 高山市民文化会館（2-5）

自然公園；国立・国定・県立自然公園を考える

■ 会員を募集しています！ 年会費＝個人 2,000 円 家族 3,000 円 団体 5,000 円
あなたの知人、友人に入会をおすすめください
・郵便振替 00800-8-129365 振込先 乗鞍岳の自然を考える会

くらがね通信 第78号（秋号）2019年10月10日発行

発行者 乗鞍岳と飛騨の自然を考える会 〒506-0055 岐阜県高山市上岡本町4-218-3 飯田 洋

TEL：0577-32-7206・FAX：0577-32-7207

下記URLのページからくらがね通信のバックナンバーが閲覧できます。

★<http://iidalaw.net/norikura.html>

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。

■ 編集責任者：松崎 茂

E-mail: ponykun0428@hidatakayama.ne.jp TEL：0577-34-4703

表紙写真提供：小池 潜

印刷：山都印刷